気管支喘息に炙甘草湯――一例報告――

仙台市・木町さとうクリニック　佐藤田實

【緒言】

気管支喘息に炙甘草湯が有効な一例を経験した。地黄剤が喘息にも効くことは初めての経験だったので少し勉強してみた。

【症例】

女性　68歳　主婦

〔既往歴〕 22歳　蓄膿症、48歳　偏頭痛、58歳　高血圧症、61歳　気管支喘息、62歳　狭心症、63歳　子宮下垂、66歳　胆石症（後に胆嚢摘出）、67歳　肩関節周囲炎。58歳以降は高血圧症に始まり、次々と患った。

〔現病歴〕 喘息は平成4年に始まった。毎年春と秋は必ず発作が起きた。明け方4時頃になると強い空咳が頻発し、やがて喘鳴を来たして起座呼吸に陥いる。病院で点滴を受けると落着き入院したことはない。

〔現在症〕 身長156cm、体重63kg。舌乾燥。脈普通。皮膚がやや浅黒い。腹が膨隆し両側胸脇苦満を認めた。血圧166-92mmHg。常に便秘。

〔治療歴〕 当科へは偏頭痛を訴え、平成10年5月に初診した。喘息治療は患者は始め望まなかった。不眠と便秘を訴えた時期に半夏厚朴湯と大柴胡湯を用いたが、喘息には改善の様子がなく、柴胡剤は無効と考えた。また高血圧と狭心症のため麻黄剤は禁忌とした。他方、胆石手術後の虚労に八味地黄丸が、また肩関節周囲炎には十味挫散がよく効き、喘息にも地黄剤を試みようと治療の機会を窺った。

以下薬剤は十味挫散を除き、他は全てエキス剤を用いた。また便秘に大柴胡湯を常に用いたが、記述上は省いた。

〔治療経過〕　平成13年1月に口が渇き、夜咽に違和感を覚えると訴えた。喘息の兆しと見た。前述の経緯から地黄剤の滋陰降火湯を用いると、咽の違和感はすぐ取れた。そして春は発作が軽かった。その後夏7月に至り、症状が短期間に変化した。すなわち夜間頻尿になり八味地黄丸を用いた。治ると直ぐ肩関節痛が再発し、十味挫散料で治った。秋9月、今度は夜に軽い喘鳴と咳が始まった。滋陰降火湯に戻しても改善せず、むしろ疲れ易く、朝起きられなくなった。脈が乱れるという。問うと動悸もある。そこで10月初旬、炙甘草湯に変えた。すると服用3日目には朝台所に立っていた。2週後不整脈が消え、4週後咳が止んだ。同湯を継続し、14年の春は5月に風邪から発作を起こし、2日間手持の気管支拡張剤を飲み、その他は発作が全くなかった。

【考　察】

気管支喘息に炙甘草湯が奏功した一例を報告した。昔肺結核が多かった時代に本方を咳嗽に用いたことは書物に出てくる。戦後抗生剤と栄養の向上で結核が激減したためか、治療書に記載されなくなった。

炙甘草湯の桂枝、大棗、生姜、甘草は桂枝去芍薬湯であり、『傷寒論』の条文には「太陽病、之を下して後、脉促胸満の者は、桂枝去芍薬湯之を主る」とある。この胸満が炙甘草湯を呼吸器疾患などに応用する根拠となる。

有持桂里[1]は「炙甘草湯の之く咳嗽は、虚労の咳で、咳には勢いがあり、痰はでない。（略）。本方の目的は虚労である」と述べた。大塚敬節[2][3][6]も同様で、要約すると「炙甘草湯、麦門冬飲子、滋陰降火湯は地黄や麦門冬などの滋潤剤を含み、それ故、口や舌が乾き、皮膚はガサつき、便秘がち、夜体が温まると咳が出やすい、咳は強く大きく、痰は出ないかへばりついて出にくいなど共通の傾向がある。こうした咳で動悸息切れが伴うときは炙甘草湯にする」旨指摘した。以上から本方の目標と鑑別が理解できる。

次に症例の文献を2つ見つけた。一つは荒木性次[4]の咳嗽が主症状の症例である。35歳の婦人、ゴンゴンと強く高く響く咳が2週間前からひっきりなしに続く。他はいつもと変わりなくただ体が少しだるい。このだるいを虚労と見て炙甘草を与えたら咳がピタリと止んだ。

もう一つは龍野一雄[5]の喘鳴が主症状の症例で、23歳の男子、子供のときから毎朝喘息発作が起きる。半夏厚朴湯を与えたら夜にぜいぜいして不眠に陥った。陽虚として桂枝去芍薬湯を与えると、一週間で軽くなった。次いで頬にぽーっと赤みがさすので虚労と見て炙甘草湯を与えると、ぜいぜい苦しい感じが止み数年ぶりで安眠できた。

以上2例とも虚労ととらえて本方を用いた。著者の場合も同様で、やはり個々の目標だけではなく、虚労と全体的にみることが大切と思われる。

【まとめ】

炙甘草湯が有効な喘息ないし咳嗽は、口舌乾燥、皮膚がかさつく、便秘がちで、体が温まると咳が出やすい、その咳はから咳で強く大きく響き、痰は出ないかねばって出にくいなど、地黄や麦門冬など滋潤剤の徴候を示す。

本方は滋陰降火湯、麦門冬飲子との鑑別を要する。動悸や不整脈あるいは疲れ易いなど虚労を伴うときは本方の適応である。

【文献】

(1)有持桂里：炙甘草湯、『稿本方輿輗』巻之九、労・肺痿、十二葉－十三葉、燎原書房、1973年

(2)大塚敬節：『治療への手がかり　咳嗽」『大塚敬節著作集』第3巻、頁258、春陽堂、昭和55年

(3)大塚敬節：「漢方医学の症候のとらえ方　第一章　咳嗽」同、頁4－5同

(4)荒木性次：「甘草　炙甘草湯応用　例の三」『新古方薬嚢』頁90－91、方術信和会、昭和四七年

(5)龍野一雄：「気管支喘息に炙甘草湯」『漢方の臨床』第2巻3号、頁117、雄渾社、昭和五四年

(6)大塚敬節：「漢方経験録　心臓弁膜症」『大塚敬節著作集』第4巻、頁175－176、春陽堂、昭和55年

＊本稿の内容は第53回日本東洋医学会総会（於名古屋）で口演発表した。（医師：〒980－0801仙台市青葉区木町通1－8－15）